

自画に題す（夏目漱石）

幽居人不到

獨坐覺衣寬
來吹竹與蘭

解説 大正十五年春、自ら描いた南画の画贊として作った詩。

語釈 ※幽居＝俗世間を避けて静かなどこに隠れて住むこと。

※不到＝訪れる人もいない。※覺＝知る、感じる、という意。

※衣寬＝着物が、ゆつたりとしていること。くつろぐさまをいう。

※偶解＝はからずも、このとき理解することができた。

※春風意＝春風のこころ。

ひとり 坐して 衣の 寛がなるを 覚ゆ

偶解す 春風の 意

來たり 吹く 竹と 蘭とに

通釈 隠遁者の佗びた住いには訪れる人とてなく、一人じつと坐つてゐる内に、いつしか着てゐる着物もゆつたりとして楽に感ぜられ、心がカラリと開かれたような気がしてきた。この時はからずも、この家には私のほかに、二人の君子の居ることに気がついた。吹きわたる春風が、庭さきの竹を鳴らし、蘭の香りを運んでくれたからである。